

失われた尊厳

― 秋葉原事件にみる現代の孤独 ―

06K046 佐藤 恵

はじめに

自殺

サブカルが好きだ。『完全自殺マニュアル』という有名な本と出会ったのは大学3年の春。春は毎年憂鬱で、その頃の気分も相俟って手に取った。タイトルからも表紙からも漂う、アンダーグラウンドな雰囲気好奇心を駆り立て、光の速さで読み終えた。中でも衝撃を受けたのは、著者である鶴見済の知人の方の話。エンジェル・ダストと呼ばれるクスリを大事に持っているらしい。正式にはフェンサイクリジンという強烈な幻覚剤だが、「これでいつでも死ねる」と気楽に毎日を過ごしているようだ。いざとなれば自殺という手段がある。だから生きられる。そんな論理を持つ人の存在を、私は初めて知って驚愕した。自殺はいけないという当たり前が神話に思えてきて私は自殺を肯定しかけた。それから自殺本を読み漁り、その度に気分が高揚した。

人格コンプレックス

KYは嫌われる。KYとは2007年の流行語大賞にノミネートされた言葉で、「空気が読めない」という意味だということはもう常識と言えるほど定着した。私はこの言葉が大嫌いだ。

私は人格にも顔面にもコンプレックスがあった。それは主に人間関係の部分で感じる。楽しくないのに明るく振る舞ったりできない。嫌いなものを好きと言えない。でも明るく振る舞えと、自分も好きだと同調しろと脅迫する空気になる。それを読んでカメレオンのようにその場や相手によって色を使い分けることを求められる。KYとして嫌われたくない、できれば好かれていたい。そんな気持ちがありながらも、できなかった。したくなかった。

私は自分を責めた。なぜこんな性格なのだと。顔さえよければカバーできるのに可愛くもない。劣等感が重なり、次第に人と交流することが怖くてたまらなくなっていった。とくに初対面の人の前でシラフの時なんかは顕著に影響がでる。異常なまでに自意識過剰になり、他人の目に恐怖を感じていた。うまく話せない、目を合わせられない。それを変えたくて鶴見の『人格改造マニュアル』を読んだりもした。しかし実践できるものが少なすぎてすぐ諦めたが、カフェイン錠剤の過剰摂取は数か月続けてみたことがある。「手軽に購入できる市販薬で、効き方は覚せい剤と似ている。しかし覚醒はするが爽快感がない。だが人によっては多幸感を激しく感じるという場合もあり、さらに耐性も依存症もない。覚せい剤に匹敵する強い薬だ。」ということが記述してある。シラフでダメなら意識を濁らせたらいい。素の自分にクスリを投与して別人に生まれ変わりたい。そんな風に考えて、やっと探し出した私の悩みの解決策だったが、人格が変わるほど効果がなくやめてしまった。

私が私を生きられず、誰かを演じて生きていくなんておかしいと思っていたはずなのに、必死に周りの空気に抵抗していたはずなのに、いつからか自分を隠すことに必死になっていた。もっと冷静に考えられるようになった時、クスリだとかアルコールだとか使って、あるいは軽薄な周りへの同調で、自分を誤魔化して作り上げた他者の前の自分が別に存在することに吐き気がした。やっぱり自分には正直でいたい。で

も人に嫌われ続けたら孤独で死んでしまう。葛藤が続いた。

生きづらさ

説教臭い本は嫌いだった。サブカルチャーの一種として自殺に興味があった私は、今の日本社会がどうか、説教臭い本を無意識に避けていようだ。自殺者は年間3万人以上いる。1日に100人近く死んでいる。さらに自殺が成功しなかった人を含めれば死にたい人はこの国に山のように存在することになる。その数は自殺者の10倍と言われている。異常な事態。人々の心の中でどんな問題が起こっているというのか。なぜそんなにも死にたいのか。自分が多少なりとも生きづらさを感じていたことや、自殺ラッシュの原因を知りたくなった私は、今まで手にしなかった生きづらさについての本を読むようになった。

この世にはびこる生きづらさは、人間関係や、労働・経済問題など社会問題としていくつも存在した。自殺はその人が弱いからするのではない。社会問題からくる当然の反応である自殺と捉えることができた。生きづらさは社会のせいでもあるのに刃を自分に向けてしまうケースが何万人もいることが悲しくて仕方なかった。私の感じた生きづらさも、社会に要因があるのかもしれないと思うと腹が立った。

自殺する人達はできれば生きたいと願っていたはずだ。最後の解決手段がクスリや自殺なのはおかしい。命は重い。そして尊い。自殺は解決策ではない。生きづらさの払拭が必要だとやっと気がついた。

秋葉原無差別殺傷事件

犯人の青年は嫌いじゃなかった。彼が携帯の掲示板に書き込んだ一部を2008年の2月から犯行直前の最後の書き込みまでを『東奥日報』のサイトで閲覧することができる。その大半に共感を覚えたし、私と同じように人間関係で悩みを抱えていて他人事とは思えなかった。それに加えて異常な家庭教育や非正規雇用の問題も彼には重なって降り注いでいた背景がある。その生きづらさがなければこんな事件を起こしてはいないだろう。

この事件は自殺かもしれない。同じように要因は生きづらさにある。それに何人も無差別に殺してしまったら死刑になるとわからないわけがない。自爆テロや特攻のように、捨て身になってまで人を殺してしまふ。戻れない、先もない。自暴自棄加減が自殺と酷似している。社会問題が原因で起こる当然の反応である自殺。彼は犠牲者とも言えるのではないか。彼を死刑にしてもこの問題は解決しない。同様の殺人が続くだけだ。

彼の抱える生きづらさへの共感、さらに興味のあった自殺との関連、そして彼が単なる殺人鬼とみられることへの強い違和感。この問題を考えつくしたいという欲求が私の中で生まれた。

1. 2008年6月8日@秋葉原

戦場

秋葉原と言えば、ゲーム・アニメ・コスプレ・萌え・ツンデレ… 映画『電車男』が大ヒットし、オタクの聖地のようなイメージが蔓延した。電気街として栄えてから幾年かを経て、オタクの街として変化を遂げたこの地は、日本全国にとどまらず世界中から観光客が押し寄せる。家電量販店目的の人もいれば、ゲームやアニメ好きな人もいる。世界のAKIBAとして名を馳せた。

秋葉原の日常とは、コスプレした女性がチラシを配っていたり、メイドに扮した人に案内をしてもらえたり、街全体が異世界のようなもの。事件前には、路上での過激なパフォーマンスが問題視されていた。2008年3月～4月の事。ローアングラーと言われる、メイド姿で下着を見せながら座っている女の子を撮

影する集団や、「アキバ四天王」と呼ばれるコスプレグループのエアガン乱射、自称セクシーアイドルの下着見せパフォーマンスでの逮捕… 秋葉原に詳しいブロガーですら「無法状態、カオス」とブログに綴っている。この頃から警察による歩行者天国の取り締まり強化がなされ、ネタを物色するマスコミも増えつつあったようだが、6月にはすっかり落ち着いた様子だったとされている。このような秋葉原が事件の舞台。

白昼の惨劇

2008年6月8日 日曜日。秋葉原は歩行者天国となっていて、買い物客などで賑わっていた。午後12時30分過ぎ、白の2トントラックが1台姿を現してからおよそ2分間。たった2分の間で7人もの命が奪われ、10人が重軽傷を負うことになる。

トラックは他の車両をかいぐり、赤信号の神田明神通りと中央通りの交差点に突っ込んできた。青信号を横断していた1名の大学生が気づいたときはもう遅く、腰をはねられ隣に歩いていた友人と一緒に倒れこんだ。彼はこの日、大学の友人と4人で映画を見た後、いつも通り平和な雑談をしながら歩いていた。はねられて倒れた直後、後ろを歩いていたもう2人の友人の姿を探すも見当たらず、遠くで「逃げろ!」と声が聞こえたが、訳もわからない状態。やっと2人の姿を確認し駆け寄ったが、血だらけになり頭は潰れていて素人目で見ても明らかな重体だったようだ。トラックはその4人以外にも、74歳の歯科医を引退したばかりの男性を轢き、70メートル先で停車した。ブレーキ痕はなかった。これで大学生2名と74歳男性は亡くなり、2名が負傷した。

停車したトラックから、ベージュのジャケットを羽織った男が降りた。眼鏡をかけていて、イマドキとは言い難い出で立ち（主観だけど）。シンメトリーが美しいとコレクターに人気のあるダガーナイフを手に持っていた。ダガーナイフとは、両刃の短剣のようなもので、もともとは対人殺傷用に作られている。つまり、人間の未来を削りとるには十分だということだ。男はその武器を装備し、奇声を上げながら走り、周りにいる人間を刺してまわった。接近していた27歳男性を背面から刺した。様子を見ていた人の「逃げろ!」との声が上がリ、日曜の歩行者天国は日常を失う。買い物客が逃げ惑う中、音楽系の会社に就職が決まりアルバイトに励んでいた21歳東京芸術大学4年の女性が、はね飛ばされた人を助けようと駆け寄った。110番しながら交差点に向かったところが男の目に留まり、腹部にナイフを受けた。彼女は失血で死亡した。男は突き刺さったナイフを抜き、47歳男性の背部を刺し、彼もまた亡くなった。

交差点付近にタクシーがいた。運転手の54歳男性が車を降り、車ではね飛ばされた男性を救護しに行くと、右胸を刺された。彼は一命を取り留め、刺された瞬間右胸に焼かれるような熱を感じたと話したそうだ。その後男は、はねられた男性の周りにいた53歳の警察官の背中を刺し、重傷を負わせた。さらに付近にいた30歳女性の胸部を刺し、こちらも重傷。男はトラックではねた意識不明の男性の体にも刃を突き立てるという残虐な行為を見せている。

男はまた走りだし、43歳会社員の背部を刺した。彼は麻痺状態で、ほとんど痛みも感じず会社に電話をして「刺された」と話しているが、重傷。男はダガーナイフを握りしめ、33歳の調理師の男性の背部、28歳会社員男性の右腕、31歳会社員男性の胸部を次々に刺し、切りつけて走った。男は歩行者天国の中央通りの方へ移動し、53歳男性の腰を刺した。そして最後に、24歳女性が背部から刺され肺にまで達する傷を負わされ倒れた。

男は警察に追われ、路地に入りこみ、拳銃を向けられると簡単にダガーナイフを捨てて押さえられた。事件後、詰め寄る警察官と男の様子が静止画でニュースに大々的に取り上げられていたのが記憶に新しい。男は力が抜けたように路地に倒れこみ、パトカーが到着して乗せられていくまでの映像も全国

に流れた。これが事件当日の全貌。犯行の流れは岡田尊司の『アベンジャー型犯罪 秋葉原事件は警告する』に詳しい。

ショータイム

たったの2分間の出来事だというのは信じがたいほど犠牲者がでた。犠牲者とは亡くなった7人か？ 負傷者も入れて17人か？ 私はいずれも違うと思う。彼や彼女たちの家族や恋人、友人や親戚、きっと生まれたであろう新しい命に至るまでもが犠牲者だ。しかし私には彼らの気持ちになることはできないし、ナンセンスだと思う。そこで車で腰をはねられた大学生のブログ『近くそして遠い雲の下で』を紹介する。当時の記事に彼なりの思いを書き綴ってくれている。

今日は空の境界を観たあと秋葉原にいった。

…最悪だった。
今日は人生で、生涯で一番最悪な日だろう。
僕は大切な人を二人失いました。
大学の友達…
こんなにもあっさりと…

今日は行くあてもなく適当に歩いていた。
緑信号の横断歩道。
いつも通りのグダグダな雑談。
どこにでもある平和で普通な話。
思い出すと涙が止まらない。

…トラックが自分らに猛スピードで突っ込んできた。
…ほんの一瞬だった。
隣にいた友達と俺はぎりぎりでよけて腰の打撲だけで済んだ。
本当に死線だった。
すぐ振り返った。
後ろにいた友達二人が…いない。
ゾッとした。
震えがとまらなかった。
その直後発せられた「逃げろ！」
ナイフを持った男？ 通り魔？
意味がわからなかった。
直後ひかれた友達にすぐさま駆け寄った。
…立ち尽くした。
素人でも分かる、重体。
自分はなにもできなくて

ただ大声で、何度も何度もそいつの名前を呼んだ。
やがて応急処置の知識のある人達があつまりだした。
…すごいなと思った、半面、情けない。
そんな中
回りを見回すと
カメラ、携帯、カメラ、携帯…
なんなんだよお前ら、馬鹿ばっか…
カメラぶっ壊してやろうかと、携帯逆折りしてやろうかと
そう思った。
「不謹慎です、やめてください!」
とりあえずやめさせようとした
無視された。
嫌な顔もされた。
…なんで?
悔しくて涙が止まらなかった。
その後救急隊が到着した。
…と、すぐに口から出た言葉。
「この子は"黒"だから搬送は後だな」
二人の身体に告げられた。
黒…馬鹿でもわかる、イメージできる。
白より、嫌な色。
重体なら先に助けてよ。
こんなに血が、意識もなくて…
可能性があるほうから…
わかってる。
そのほうが賢明だってことくらい
…ただ悔しかった。

(中略)

神様…僕らが何をしたの?
運命だから?
そんなの残酷すぎる…
明日…当たり前の日常が消えている
怖い…
犯人…ネット上で予告してたらしい
人を殺すために来た?
アホか
死ねよ…カス…

現場の雰囲気や男への嫌悪の感情、そして周りの人間の様子。その中でも印象的だったのが野次馬化した人々が携帯などで写真や動画を撮影していたことに対する怒り。まるで事件そのものがエンターテインメント化していて、見世物のような状態だったのが許せなかったようだ。あたりまえの反応だと思う。10代の少女が電話をしながら友人と思しき人物に「今から写真送るね!」などと半ば興奮気味に話していたというような事実もある。マスコミも「犯人はオタクっぽい服装でしたか」という内容を現場でしきりに聞いていたそうだ。安易なストーリーを求めているに違いない。助けようとして被害にあった方々もいたし、懸命な救助活動が行われている最中、大半の人がそのような振る舞い。ブログや掲示板や動画サイトなどで誰でも情報を簡単に発信できる今は、報道とか野次馬とかその境界線はとてもあやふやなものだと思うけれど、面白おかしくネタにしている野次馬たちは非常に罪深い。

事件直後には、テレビのニューステロップで事実が流された。私はこれでこの事件について知ることになる。この日以降メディアは秋葉原通り魔事件、秋葉原無差別殺傷事件、と名をつけ大々的に報道した。そして徐々にこの事件の主演の男の素性が暴かれていった。それは衣服を剥ぎ取り丸裸にすることよりもえげつない。皮や肉を通り越し、精神の細部までに至る。

この事件は残酷だった。確かに。人間のすることとは思えなかった。男は人間であることを放棄したのだと思った。果たして彼は獣だろうか？ 彼の名は加藤智大。犯行当時25歳、無職の独身。その後の供述によると「誰でもよかった」と特定のターゲットがいたわけではないことを示唆している。なぜこのような大犯罪に手を染めたのか。生い立ちを辿ってみた。

2. バックグラウンド

幼少期

1982年9月、青森県青森市の新興住宅街に生まれる。事件当時父親は49歳、母親は53歳だった。加藤智大が生まれて3年後には弟が生まれた。厳しい家庭に育てられた加藤。5歳の頃弟を連れて家出したことや、雪の積もる極寒の状態の外に立たされた経験がある。母親は中に入れるよう近隣の方に言われたようだが聞く耳を持たなかった。

小学校では勉強もスポーツもできる児童だったという。将棋部と陸上競技部に入っていたそうだ。以下は携帯サイトの書き込みから引用。

6月4日 「唐突に小学生の頃を思い出した」

「人生にはモテ期が3度あるらしいけど、俺のモテ期は小4、小5、小6だったみたいだ」

「考えてみちゃ納得だよな 親が書いた作文で賞を取り、親が書いた絵で賞を取り、親に無理やり勉強させられてたから勉強は完璧 小学生なら顔以外の要素でモテたんだよね 俺の力じゃないけど」

「親が周りに自分の息子を自慢したいから、完璧に仕上げたわけだ 俺が書いた作文とかは全部親の検閲が入ってたっけ」

と記している。母親は読む本も自由に選ばせてはくれず、読んだ本は感想文を書かせていた。文字を間違えると、間違えた箇所だけ直すのではなく、全文書き直すよう指示されていた。作文や絵画だけではなく、自分自身を「母親に仕上げられた作品」と解釈している。

中学時代

6月4日 「中学生になった頃には親の力が足りなくなって、捨てられた より優秀な弟に全力を注いでた」

「中学は小学校の「貯金」だけでトップを取り続けた 中学から始まった英語が極端に悪かったけど、他の科目で十分カバーできてたし」

青森県立佃中学校というエリート校に入学し、テニス部に所属していた。ここでも成績はよく、学年300人中1、2番だったという。当時は彼女がおり、薔薇の花束をプレゼントするなどというエピソードもある。しかし母親は男女交際にも厳しかった。ラブレターにも似た年賀状が届き、それを見つけた母親はみんなに見えるよう家の冷蔵庫に貼りだしたそうだ。

当時の同級生からはキレやすかったという指摘もある。母親は中学時代も自分に都合のいい規律によって縛りつけた。好きだったゲームも土曜の1時間と決められていたし、家族で食事をしていた時母親がヒステリーを起して加藤を叱った。廊下に新聞紙を敷き、その日の食事をぶちまけた。加藤はそれを泣きながら食べたことがあると、弟が証言している。

高校時代

母親の出身校、青森高校という名門校に進学する。ソフトテニス部に入るがあまり出席しなくなっていた。エリートに囲まれ、成績も段々と落ちていく。周りには小中学生の頃と違い、影が薄かった生徒だと感じられている。

反抗期も相俟って母親を殴ったこともあったようだ。親に反対されつつも、車が好きだったことから自動車関係の学校を志望。この頃の夢はトヨタで自動車設計をすること。まだ自分の将来に希望を持っていた。

短大時代

志望通り、中日本自動車短期大学自動車工学科に入学。バイク部に所属して友人とツーリングしたりして楽しんでいただ。当時は成績優秀で、一流自動車メーカーに就職が可能だったと言われるほど。しかし、彼は二級自動車整備士の国家試験の実技免除に必要なだった実習科目を受講せず、弘前大学へ進学し中学教師になりたいと言いだしたそうだ。それは両親の希望に添わなければならないという義務感のようなものからだったのだろうか。結局大学受験に失敗し、就職もせずに短大を卒業した。

派遣社員時代

短大を卒業後、弟のいた宮城県仙台市に向かう。コンビニで数カ月アルバイトをし、仙台市に本社をおく東洋ワークという派遣会社に登録。2005年2月に工事現場の誘導員の仕事に就いたが、辞めた。仕事では無断欠勤もなく、自動車関係の仕事がしたいという思いだったようだ。その当時にはスバルの白いインプレッサ（スポーツワゴンのような車）を購入している。その後製造派遣会社日研総業に登録し、2005年4月に埼玉県上尾市にある日産ディーゼル工業の工場で働いた。日産ディーゼルといえば2008年12月に年内の200人派遣労働者を削減すると公表し話題を呼んだ会社だ。1年間労働し、2006年4月辞職。正しくは無断欠勤後連絡が取れなくなり契約が解除されたということだ。いわゆるバックレ。同年5月、大阪府高槻市に本社のあるフジワークに登録。茨城県常総市の住宅建材メーカーの工場で働く。車とは関係ない職場だ。日産ディーゼルで理想と現実のギャップに気付いたのだろうか。興味が失せたのかと思いきや、この

当時マツダのRX-7（スポーツカー）を購入し、マフラーを改造して乗っていた。彼の収入から考えて、車を購入した上に改造して自分好みに仕上げるようなことは不可能だろう。金銭面ではずいぶん無理していたと考えられる。

同年9月にはこの職場からも逃げだし、契約を解除された。その後加藤は青森へ戻った。職場を転々とし、落ち着くことが少なかった。

正社員時代

少し間があき2007年1月には青森市の運送会社八洲通運に入社し、4月にはその正社員になることができた。2トントラックで食品を運ぶ仕事だった。車を製造する側ではなく乗りこなす側になった。仕事も真面目にこなし、とくに問題はなかったと同僚には言われている。職場での人間関係も良好だった。

順調に「軌道修正」をこなして見せたように思えるが、彼の両親の離婚問題が浮かび上がった。両親は憎むべき相手のように思えたが、2人の事で深く悩み、時には涙を見せることもあったというから不思議ではない。同年の9月には一身上の都合で退社してしまった。

再び派遣社員に

退社後、11月には静岡県裾野市御宿のトヨタ自動車の子会社、関東自動車工場で塗装漏れのチェックを行う仕事に就いた。仕事の評価も最良だった。1日約8時間労働で、時給は約1,300円。一週間おきに日勤と夜勤が入れ替わる。加藤は裾野市富沢にある、日研総連が借りているマンションで1人暮らしをしていた。この時期は白の軽自動車を所有していたようだ。仕事が辛く、次第に気持ちに余裕がなくなっていき、携帯サイトへの書き込みも頻繁になっていった。

3. 様々な見解

非モテ・非正規雇用・家庭内問題… いくつもの問題が集約したこの秋葉原事件。この事件をどう考えるべきか。識者たちの見解に注目してみたい。『アキバ事件をどう読むか!?!』に掲載された文章の引用により紹介する。

赤木 智弘 社会性への渴望

フリーターでフリーライター。『論座』2007年1月号に掲載された「『丸山眞男』をひっぱたきたい—三十一歳、フリーター。希望は、戦争。」で一気に脚光を浴びた人物だ。彼のその挑戦的な文章は識者だけに留まらず、私も衝撃を受けた。

「東大出身のエリートの横っ面を、中学も出てないような奴がひっぱたけるという希望は、戦争でも起こらない限り望めない。」（社会の流動化・格差の解消）「国民全体に降り注ぐ生と死のギャンブルである戦争と、一部の弱者だけが屈辱を味わう平和があるなら、弱者にとってどちらが望ましいかなど考えるまでもない。」「国民全員が苦しむ平等を」というようなことが書かれている。そんな彼はこの問題をどう考えるのか。

「この社会は、親と同居する若者を「パラサイトシングル」と呼び、自立こそが社会人のあるべき姿であると煽動している。さらに親と同居して働かなければそれを「ニート」と呼んで、人間としての資格がないがごとく非難する。加藤容疑者はそうした社会からの要求を受け入れ、自立して働いてい

た。しかしそれでも、社会は最低限の尊厳すら、彼に与えなかった。

加藤容疑者は、携帯サイトへの書き込みの中で盛んに「彼女が欲しい」と書き込んでいた。それは決して「女が欲しい」という欲望の吐露ではないと、私は思う。

工場派遣という労働形態で、会社からの命令一つで住居と職場の移動を余儀なくされ、そこで覚えた仕事も人間関係も全て賽の河原に石を積むがごとく破壊される彼にとって、彼女というのは、会社都合に左右されることのない、自分にとってのプライベートな人間関係、すなわち社会性への渴望ではなかっただろうか。(略)

しかし、それまで社会の要求全てに応えながら、なんらまともな見返りを得ることのなかった加藤容疑者は、最後の最後に要求を単純に飲み込むことを拒み、他人を巻き込んで人生を終えることを選択してしまった。(略)

私は彼の犯行に殺人者の心情よりも、家族のために会社のためにと必死になって働いた結果、健康を損なったり死を迎えてしまうような、少し古くさいモーレツサラリーマンの心情を想起してしまう。

彼の行為を卑下し、嘲笑うことは、そうした真面目に生きるしかない人々を嘲笑うことに等しいのである。」

雨宮 処凛 働き続けたくてキレた25歳

自身の学生時代にうけたいじめから、リストカット、オーバードーズ^(注1)などを経験。右翼団体に入会したり、イラクに行ったり、北朝鮮に行ったり…全身当事者主義という雨宮さんは、自伝、生きづらさ、自殺、雇用などに関する本を数多く執筆。現在はプレカリアート^(注2)の問題を中心に活動・執筆を行っている。この事件に関して、著書『排除の空気に唾を吐け』では、「彼は明らかにトラックで突っ込む場所を、そしてダガーナイフを振り回す相手を間違っている。」「彼が殺した中に、彼を苦しめるシステムを作り出した人はいない。」「この事件の原因すべてが「働き方」にあるわけではない。しかし、「絶望」を生み出すこの国のシステムについて、私たちはもっと深く考えなければならない。」というように言及した。

「彼は孤独のなかで黙々と仕事をした。スキルアップの道が閉ざされ、いつクビになるかもしれない派遣労働の正体に気づいたとき、格差を決定づけ固定化する仕組みが手に取れたはずだ。非正規雇用の若者はだらしがないというバッシングがあいかわらずあるが、こういう紋切り型の見方は、社会的な悪弊を固定化し、強化する方便として巧妙に利用されるのがオチなのがいいかげん皆、気づくべきだ。(略)

ハイパーメリトクラシーという超実績重視主義のもと、世の中の風潮として高度のスキルや人間関係を築くコミュニケーション能力がないと、人として認められない空気がある。何か一つ欠いて「人間力」がないとみなされてしまえば、就職もできないし、友達もできないし、彼女もできない。生き方が「ブサイク」な彼個人に、そうした「できない」問題が一気に襲いかかっていた。

私から見て彼は決してブサイクではない。しかし一度自分でダメ烙印を押してしまうと、その時点で異性との回路が断たれ、モテる人との格差は開く一方となる。今の若者のかなり多くが陥っている自分をネガティブに追い詰めるスパイラルに彼もまた同様に陥っていたのだ。(略)

そういう彼がまっさきに思いついたターゲットがアキバだった。アキバに行き交う若者たちは、自分とちっとも変わらない。特にモテそうでも大金を持ってそうでもないのに、みんな楽しそうにしている。そんな「なりたい自分」が行き交うアキバは、近親憎悪にも似た憎しみの象徴として映ったのかも知れない。(略)

彼は毎日ツナギを着て派遣先の仕事場できちんと働いていた。怠け者ではないのだ。90年代の若者であれば、単純作業の繰り返しや、イケてないツナギに憎悪が向けられただろう。鬱積したエネルギーが爆発するとき、「こんな仕事、やってられるか!」と、怒りの矛先はつまらない仕事に向けられたはずだ。しかし、実直だった彼は、仕事がしたかったし、ツナギを着たかった。働きたくないのではなく、働き続けたくてキレた25歳の派遣労働者。これは、せつなすぎるほどにせつない。」

注1：薬物過剰摂取（over＝過剰に　dose＝飲み薬一回分の服用量）

注2：precario（不安定な）と proletariato（労働者階級）が合わさった造語。不安定な労働者の総体。

吉田 司 「弱者」に向けられた意志のある刃

ノンフィクション作家。『下下戦記』『ひめゆり忠臣蔵』『世紀末ニッポン漂流記』などを執筆。秋葉が事件の舞台だった理由、また「誰でもよかった」には真のターゲットが潜んでいることを述べた。

「《5月19日　午後4時47分　両親を恨んでんの？（本人以外からの書き込み）
午後5時00分　殺しても足りません》

なら、歩行者天国でやる前に自分の親をやるのが筋だろうと誰だって思う。つまり、これは、ホントは「誰でもよかった」殺人ではなく、「両親をやりたかった。でも、できなかった」身代わり殺人という側面も出てくる。「誰でもよかった」というセリフにだまされちゃいけない。それは犯罪者が自己欺瞞のために言う言葉なのだ。

事実、加藤容疑者は、アキバのゴシックロリコンや“萌え”のファンタジー王国（無防備都市）にトラックとダガーナイフで武装したリアルな狩人（ハンター）として姿を現したではないか。非武装の弱者（獲物としての通行人）を殺す強者に変身していた。そう、彼は「誰でもよかった」どころではない。ただひたすら武器をもたない、抵抗できない「弱者」だけをねらった「弱肉強食」殺人をやったのだ。アキバが選ばれたのは、そこがいま日本でいちばん無力で平和な羊の群れ、「オタクの聖都」だったからだろう。（略）

私は『東京新聞』（4月4日付）のコラムにこう書いた。

「すなわち『誰でもいい』はひっくり返すと『物語の主人公はわたし』という意味になる。他者は殺される通行人という端役が与えられるだけ——こうした考え方は新自由主義や新古典派経済学の典型『合理的経済人』（自分の利益を最大限にすることを唯一の基準として行動する）を想起させる。他人の痛みを理解しない人間像だ。そう、無差別殺人の流行とこの経済学の世の中は通底している」

検察は加藤容疑者を“精神鑑定”にかけると言ったが、どうしてそんな必要があろうか。これはターゲットを冷静に「弱者だけ」に絞り込み、最小の投資＝たったナイフ1本（5本か）で、自分の「やりたいこと…殺人　夢…ワイドショー独占」という最大利益を達成したきわめて「合理的」な殺人だ。計算高い犯罪なんだぜ。」

斉藤 環　一元化した対人評価、負け組・弱者という思い込み

医学博士で、現在精神科診療部長をしている。専門は思春期・青年期の精神病理、病跡学。思春期が専門ということで、少し前まで10代だった私は共感する点が多くあった。学校内での人気ヒエラルキーの構造や、対人評価はコミュニケーション能力で決まること、それは大変貧しい価値観であること。まさにその通りだと思う。鳥肌が立つほど自分の思いとリンクする部分が多かった。それが以下の文章。

「“負け組”意識は、じつはいま多くの若者に共通する根深い問題である。

最近では思春期のかなり早い段階で、場合によっては中学生くらいから、自分は負け犬、負け組という意識を抱かされてしまう子ども達が少なくない。ここにはイジメの問題もからむことになるが、スクール・カーストの下にいる者ほどこうした意識に進んで固着する。たとえば周囲からオタクと認定されてしまえば、ただちにカースト最下位が決定づけられる。したがってアニメ好きの中高生であれば、その嗜好を必死に隠そうとする。

イジメにさらされやすいもうひとつのタイプは、コミュニケーション能力における弱者である。端的には“笑い”がとれるかどうかがかかれ目で、ウケなければカーストを転げ落ちていくことになる。むしろ、イジメの対象として笑いにされることとは意味が違い、面白いネタを提供できるかどうかの問題だ。

笑いがとれ、弱者をいじるほうに回った強者はスクール・カースト上位に君臨し、学生生活を謳歌できるが、一方のコミュニケーション弱者はカースト下位が固定化されたまま、鬱屈が常態化することになる。

かつての子どもの世界では、スクール・カーストの決まり方が一様ではなかった。なんらかの高い能力があれば、それをもって一目置かれるという多様な評価軸があった。しかし現在は、極言すれば対人評価が、ほぼコミュニケーションスキルに一元化している。その能力を欠くと、カースト下位でイジメの対象になりやすく、異性にも相手にされないという負の連鎖に落ちこむ。すなわち、非常に貧しい価値観がカーストを決定づけ、すべてを支配するという暗澹たる世界が展開されている。(略)

実際にはそれほどでもないにもかかわらず、彼は自らのブサイクさを強調してやまない。これは精神医学で、「醜形恐怖」と呼ばれる疾患の葛藤の構造に似ている。自分を醜いと決めつけ、醜い自分は周りに迷惑をかけてしまう、だから他人との付き合いを断つ、という思い込みを招きやすい病理である。彼の葛藤にはこの醜形恐怖と構造的に近いところがあるように思える。

ブサイクを連呼する彼の訴えの表面をなぞっていくと、被害的な様相しか見えてこない。しかし、わたしが思うに本質は逆で、むしろ罪悪感ないしその延長線上にある加害者意識にさいなまれていたように見える。(略)

昨今の世間の風潮として「見た目重視」が意外なほど浸透し、強固なイデオロギーにまでなっている点が挙げられる。うがった見方をすれば、外見に本質がすべてあらわれる、という奇妙な確信である。こうした社会的風潮こそが、「醜さを曝すことそれ自体が有害な加害行為なのだ」という屈折した思い込みに至らしめる土壌として作用しているのではないか。(略)

こうした問題は、たとえば加藤容疑者に「彼女」がいたら解消していただろうか。必ずしもそうとは思われない。派遣労働者という社会的な問題の背景には「自分自身からの排除(湯浅誠)」という問題があるといわれる。わたしたちはこうした“負の思い込み”にとらわれている若者が相当数存在していること、しかも彼らが、啓蒙や説得によるサルベージが極めて困難なパラドキシカルな問題を抱えている実態を突き付けられたのである。

自分自身と敵対するかのような彼らの自意識は、「敵の見えない時代」である現代の陰画として生じたのかもしれない。もしそうだとすれば、まず回復されるべきは「健全な自己中心性」であり、「まっとうな被害者意識」ではないだろうか。あえて仮想敵を作らずにそうした回復がいかに可能となるかが、あらためて問われなければならない。」

本田 透 殺人はスキルなくとも主役になれる手段

『電波男』の著者である。『電波男』では恋愛と経済が絡み合う「恋愛資本主義」下のモテない男をテーマにしている。彼は加藤と似ている部分が多くあり、加藤の携帯サイトへの書き込みを見て、自分が書いた文章のようだと感じたいらしい。「事件を起こしたこと以外、ほとんど僕と一緒になんです。」と語る。

柳下毅一郎 製造派遣は視野狭窄の入り口

殺人研究家という珍しい肩書の持ち主。『殺人マニア宣言』の著者。彼の『映画評論家緊張日記』というタイトルのブログでは映画の評論を行っている映画評論家でもある。多摩美術大学常勤講師。この2名の対談をここで紹介する。

本田：いわゆる「大きな物語」が死んだと言われて久しいわけじゃないですか。「小さな物語」として、恋愛とかいくつかのパターンがあって、オタクになるというのもそうしたパターンの一つだろうと思いますが、結局彼の場合どの物語にも乗れなかったんだと思います。2ちゃんねるでも居場所がなくて、携帯サイトの個人掲示板という誰も見ない場所に行っちゃったんだろうけど、どのコミュニティにも入れなかったの、自分の物語が全く持てず、自分が何者なのかわからなくなってしまったのではないか。そういう人が最終的にどうなるのかというと、スキルがなくても物語の主人公になれる方法としてはテロリストになって一日だけでも主役になろうとする。あれと同じですよ、昨年アメリカで起こったヴァージニア工科大学の三十二人殺し。犯行声明のビデオに執拗にセレブ層に対する怒りを叫びまくった在米韓国人、チョ・スンヒの銃乱射事件と同じだと思います。

(略)

柳下：日本では珍しいパターン。というのは、日本人はやっぱ自殺するんです。まあ、無差別殺人も一種の自殺なんだけれども。池田小児童殺傷事件の宅間守とか今回みたいなパターン、「自分が死ぬだったら皆、殺しても一緒だ。世界が滅んでも一緒だ」という。セカイ系か(笑)。こういうタイプはアメリカだと銃の乱射事件を起こすんだけど、日本人だとどうしてもエネルギーが足りないらしくて、たいていは暴れる前に『完全自殺マニュアル』持って、富士の樹海に行くか、最近だと硫化水素で自殺しちゃう。

本田：今回の事件は加藤容疑者が派遣労働者だったことで派遣労働の問題が指摘されていますが、根底にはやはり格差問題がありますよね。僕も工場で単純作業をしていたときは、頭の中がかなりテロリスト的な状態になってました。

(略)

柳下：やっぱり単純労働やってると人間性破壊されるんですよ。

(略)

出稼ぎで働いている人だって国に帰れば家族が待ってるわけで、そういうのがなくてまったく人間関係から切り離された状態で生活していたわけでしょう。寮に帰っても一人でアニメ見るか、ゲームをするくらいしか楽しみはないわけでしょう。

そんな生活じゃあ彼女もできないしね。

(略)

人間何らかの形で自己実現をしないとやっていけない。仕事はその場でない、彼女もダメ、ネットでのコミュニケーションもダメとなったら、もう死ぬしかない、ということだったと思う

んですよ。

(略)

本田：『電波男』は、「恋愛はどうせ幻想なんだから、モテなくても脳内を豊かにすればいい」って発想だったんだけど、経済的に最低限の保証がないということは、オタクすらできませんものね。オタクもできないというのは自己完結できないということだから、そうするとやっぱりテロリストは増えますよね。チョ・スンヒがブルジョアへの恨みつらみで延々ひどいこと言ってましたが、まさに日本もあななと思います。

柳下：ヴァージニア工科大学まで行けたんだから、ちゃんと卒業すればひょっとしたらグーグルに就職できて、セレブな暮らしが待ってたかもしれない。

それがどうしても視野狭窄になって他の可能性が見えなくなっちゃう。それこそ製造派遣で働くというのは、まさにそうした視野を広げさせないしくみなのかもしれない。ちょっと立ち止まって考えれば、無差別殺人なんかしても何もならないというのはわかるはずなんで。

本田：条件がいろいろ重なって、もともと性格と社会的環境がピンゴのようにそろってしまったということでしょうか。でも、今後増えると思うんですよ、僕は。日本もアメリカ化したわけじゃないですか、新自由主義で、自由競争で自己責任と。ということは同じようなことになりますよね、銃がないだけで。今回のことで銃はなくてもダンプカー借りればいい、というのもわかったわけですし。

(略)

柳下：で、今後犯罪が増えるかっていうことになると、まあ増えてきますよね。なんでかっていうと日本が貧しくなるから。(略)

こういうのを増やさないためにもやはり「貧乏はイカン」わけです。

蔵 研也 格差の否定はただの嫉妬 それよりも価値観の醸成を

岐阜聖徳学園大学経済情報学部準教授。『国家は、いらない』『無政府社会と法の進化』などを執筆。これまでのものと着眼点が異なり、社会のせいにするのは正しいのか？と問題提起する。一見私の思考とは真逆、反対意見のように思われるが、共感する点はいくつもあった。

「加藤の生活は居所を転々とせざるを得なかったとはいえ、どう考えてもバングラディシュでハリケーンにあった人々、あるいは四川大地震やミャンマーのサイクロン被災者よりは恵まれていた。生活水準だけを見れば、何の関係もない数多くの他人を殺すことへの正当性はまったく存在しない。(略)

若年派遣労働者は、「日本」という枠組みで見れば「負け組」であり、その社会システムを恨むことも止むを得ないのかもしれないが、一度でも途上国を旅してみれば、別の価値の枠組みに触れ、そうでもないし、まだまだやっていけることは痛感できるだろう。(略)

人間は不可避な事実として一人一人その境遇が異なっている。それを前提にして自らの生き方を選ぶ自由があり、同時にその結果について責任をとる必要があると考える。これは安易な自己責任論とは違う本源的なものだ。(略)

また、社会的な劣等感をもつ個人に対して同情するあまり、国家の強制力を使って、背景となる社会の強制を叫ぶでしょう。だが、国家活動への過剰な期待(寄生)は、結局、我々一人一人が自助努力しようとする意志の減退と放棄につながってしまう。そういった精神的な墮落こそが危惧されるのだ。(略)

アキバ事件のような、不平等をもたらす憂慮すべき危険性や社会的コストは確かに実在する。それでも私には、経済格差の追放、あるいは「結果の平等」というものが優先的・絶対的な価値をもつとは思われない。それはなぜか？

理由の第一は、結果の平等は、個人の人生において投下してきた努力や労力、創意工夫などといった、実に人間的と呼ぶべき美徳を裏切ることになるからである。何の努力もしなかった人間が、寸暇も惜しんで知的、あるいは肉体的な労働に励んできた人と同じだけを得るとするのは、我々の感じる正義の基準に明らかに合致しない。(略)

人類の知識とその科学技術が前進を続ける限り、その結果として生じる、「先進国内の経済格差の増大自体が悪である」という主張は、単なる嫉妬にすぎないというべきだ。(略)

また、「結果の平等」を重んじ、格差社会を問題視する人たちは、現状に対して政府が富の再配分をもっと積極的に行うべきだと主張するのが常であるようだが、私はこれに強く反対する。なぜなら、私は上述のように、経済格差の存在そのものに対して価値的に中立的であるだけでなく、そもそも「経済力」というものが人間にとって最も重要である、という考え方自体に同調しないからである。

よって私見によると、このアキバ事件をもとにして経済格差の拡大を感情的に否定するべきではなく、むしろ「経済力がすべてではない」という、当たり前の多面的な価値観の醸成に励むべきだということになる。果たして、この正論的な意見に反対する人がいるだろうか？

4. 失われた尊厳

透明な存在

様々な意見に耳を傾けることで、ようやくこの事件の輪郭を捉えた気がした。前章で紹介した識者たちはこのような言葉を使って論じる。赤木「尊厳」・吉田「物語の主人公」・本田「主役」「自己完結」・柳下「自己実現」。

“自分は必要とされている（存在を承認されている）と理解する”こと、“自分の物語を所有し、主役になる（目を惹くとか振り向いてもらえる）”こと。これは生きづらさとかかなり密接に関わっている。

6月6日 「やりたいこと…殺人 夢…ワイドショー独占」(掲示板書き込み)

加藤は名もなきエキストラから、ワイドショーを独占するくらい目を引く「主役」になりたかった。

神戸連続児童殺傷事件の酒鬼薔薇聖斗は、報道で名前を間違えられたことについて強い憤りを見せた。彼が神戸新聞宛で送った犯行声明では、このように綴っている。

「人の名を読み違えるなどこの上なく愚弄な行為である。ボクが存在した瞬間からその名がついており、やりたいこともちゃんと決まっていた。しかし悲しいことにぼくには国籍がない。今までに自分の名で人から呼ばれたこともない。もしボクが生まれた時からボクのままであれば、わざわざ切断した頭部を中学校の正門に放置するなどという行動はとらないであろう

ボクがわざわざ世間の注目を集めたのは、今までも、そしてこれからも透明な存在であり続けるボクを、せめてあなた達の空想の中でだけでも実在の人間として認めて頂きたいのである。それと同時に、透明な存在であるボクを造り出した義務教育と、義務教育を生み出した社会への復讐も忘れてはいいない」

わざわざ手紙を残したり、首を門まで持っていったりと、いちいち派手。パフォーマンス的な行動には、自分はここに確かに存在するという猛烈なアピールが込められている。忘れるな、間違えるな、と他者からの正しい認識を求めている。そして透明な自分を生んだ社会への復讐心は殺人を決意する理由になってしまふということが明確になった。

上田紀行の著書『生きる意味』では、透明な存在の意味をこのように解釈し記述した。「透明な存在」の「透明」とは、他者から受け入れられるために「自己透明化」していった人間の「透明」さなのである。」これは空気を読むことと同義で、嫌われない為に他人にすぐ合わせられる、自分色を消す透明のことを指す。上田は、誰にでも好かれる透明な存在の欠陥は自分の存在感の喪失にあるという。アイデンティティや個性のかけらもない透明は、自身を語る言葉を失い、存在証明の殺人を起こすような危険な色であるようだ。そして殺人という行為をもって存在の証明を成し遂げた。皮肉なことに、この事件で犯人の少年の存在を大勢の人が認識し、数日間主役となることができた。

加藤もまた透明な存在だったかもしれない。彼は何を経てアイデンティティを欠いていったのか。なぜ他人からの評価・承認をそこまで欲するのか。そしてなぜ存在証明の手段は神戸の事件と同じく殺人だったのか。

人気のヒエラルキー

加藤はいつ頃から自分の「物語」を失い、エキストラのように薄い存在になっていったのだろうか。さかのぼると高校時代にきっかけがあったように思える。加藤の場合、小・中学生の頃は、勉強もスポーツもできたので孤独とは無縁で学校内でも表舞台に立っていた。しかし名門高校に入ってから自分の持つ能力が他人に劣り、“影が薄い生徒”とまで言われてしまう。他者の目を惹かない生徒だったということ。彼はなぜ存在を消されたのか、または消したのか。

先にふれた斉藤は「スクール・カースト」という言葉を使った。カースト制度といえば、インドにあった厳しい身分制度のことだが、そのような習慣が学校にもある。カースト制度は血が階級を決めたが、スクール・カーストにおいては人気があるかないかが序列のつく基準である。一部の人気者が上層階級で、それ以外の地味一組が下層。上層階級はいつも学校行事の主役となるので、華々しい学校生活を送ることができる。他人からの良い評価を得るのに何が必要かという点、斉藤が指摘するように「コミュニケーションスキル」である。そこに「空気が読める」も入る。自分が仲良くしたい相手をジャッジするのに、空気も読まず場をしらけさせるような人をわざわざ選ぶことはない。人気があることがまたステータスとなり、モテの格差も生まれていく。さらに、斉藤はカースト下位にいる生徒はイジメにさらされやすいという指摘もしている。

コミュニケーション能力といじめの構造について、雨宮処凛との対談本『「生きづらさ」について』では哲学博士である萱野稔人がこのように言った。

「いじめられないためには、空気を読んで、うまくたちまわらないといけない。これってたぶん、いじめだけでなく、いまの社会生活のどこにも当てはまることですよね。」

「そこにあるいじめの構造って、みんなが過剰に空気を読むことで、そこに緊張感やストレスが生じ、それをなんとか緩和するために特定のターゲットにコミュニケーションの負の部分を押しかける、というものですよ。（略）合コンなんかでいじめられキャラがいると初対面の緊張感がなごみやすい、というのと同じ原理です。」

「いじめは、子供や若者たちのコミュニケーション能力が下がって、人間関係が希薄になったから起こっているわけではありません。逆に、コミュニケーション能力がここまで要求されて、何らかの緊張緩

和がなされないと場を維持することができないから起こっている。」

名門に入学し、成績も部活動もエリートたちに負け、自信を失ってしまった加藤。彼は自分のアピールポイントを失くし、自己主張ができなくなった。コミュニケーションをとることをせず（できず）カーストを転げ落ちたあとは、いじめられないこと、排除されないことだけを考えて自分を消していったのかもしれない。ある意味望んで影を薄くしたとも考えられる。同書ではこのようなことも書かれている。

雨宮処凛 「私の知ってる子が、インターネットのサイトを六個やっているんです。アニメオタクの自分、ビジュアル系が好きな自分、普通の明るい「女子高生日記」、リストカットしている自分、というふうに使っているんですね。（略）」

萱野稔人 「うまくコミュニケーションをやりくりしているという感覚なんですね。」

雨宮処凛 「アニメの話をしているところにリストカット系の人格をもち込んだら、みんな迷惑でしょ、という感じで。そこも空気を読んでるんですよ。」

萱野稔人 「空気を読む作法としてやっているわけですね。」

雨宮処凛 「ただ、そうするとネット上に感情の掃き溜めをもてるので、リアル友達とはますます空虚な話しかしくなっていくますよね。」

人はなぜ人気のヒエラルキーの上層階級にいたいと強く願うのか。それは華々しい学校生活を送りたいというような希望の他にも重要な理由がある。

萱野稔人 「空気を読んで、まわりに過剰に同調するというコミュニケーションのあり方って、いいかえるなら、それだけ人びとが他者との関係に依存しないと自分を維持できないってことをあらわしていますよね。」

雨宮処凛 「私はずっと他人からの評価でしか自分の価値を確立できないと思っていて、いまでもそういうところがあるんですが、そういった他者からの承認とか評価なしで、自分の価値を証明できる回路というのはあるんでしょうかね？」

萱野稔人 「やっぱり、人から認められることが、自分の存在価値を証明する一番の回路だと思いますよ。もともと人間って、自分の存在価値を自分では証明できないから、他者にそれを認めてもらわないといけないんです。（略）」

そうした（高いコミュニケーション能力が要求される）社会では、他者とのコミュニケーションのなかでそのつど自分の能力や価値を認めてもらわないといけなという圧力がものすごくあって、個人の方も「自分の価値を証明しなきゃいけない」、「他者に認められないといけない」という衝動に強く駆られてしまうんです。」

他人とうまく接することができない彼は、自分の価値を証明できる術をもたなかった。

犯行直前の追いつめられた状況下では、携帯の掲示板にかなりの量の書き込みをしていた。うまく（リアルな）他人とコミュニケーションできない人たちの多くは、ネットの（非リアルな）他人とコミュニケーションをするようになる。ネット上には様々な趣味嗜好のサイトがあり、たとえば加藤のように車好きなら車好きが集まる掲示板に書き込めばコミュニティに所属できた気分を味わえる。人から選ばれるのではなく、自分で選んで入り込めるネット世界でなら自分の価値を証明することはできるのだろうか。

ネットでも孤立

「アインシュタインは何故舌を出して写真に写ったのか。それはこの世の果てを見たからだ。」なんとなく見ていた都市伝説を語るテレビ東京のバラエティ番組で芸人がそんな話をしていた。簡潔に説明する。

人類は100年周期で歴史的な発明をしている。19世紀は蒸気機関、20世紀は核。エネルギーを作れることを可能にした人類は、太陽や生物をも生み出せるようになった。そして21世紀、何が発明されればこの世の中が変わっていくか。それは反重力装置。あらゆる物を浮かせることができる。空飛ぶ車、空飛ぶ家が現実となる。そして反重力装置と反重力装置の間に鉄をくっつけるとどうなるか。硬い鉄ですら真っ二つに割れてしまう。同じように空気中でやってみると、四次元空間ができる。すなわち人間はビッグバンを作れることを可能にする。人間が宇宙を作れるようになったらどうするか。太陽も生物も生み出せる人間は、自分の星を作るようになる。そして自分の気の合う人間のDNAだけでクローン人間を生み出してそこに入れ、その世界に自分も入っていく。すると地球の表面には何も残らない。天才科学者アインシュタインにはそこまで未来が見えてしまい、人間は愚かな生き物だ、という意味で舌を出した。

少しでも生きやすくなるように、加藤もまた足掻いた。

4月15日 「ネットから卒業すれば幸せになれるという人が居ます 私の唯一の居場所を捨てれば幸せになれるのでしょうか すなわち、死ぬ、ということなのでしょう 死ぬことが幸せなのかどうか、私にはまだわかりません」

5月10日 「携帯ばかりいじっているのはダメということらしいですけど、現実では誰にも相手にされませんもの ネットなら辛うじて、奇跡的に話してくれる方がいます」

5月14日 「私はここに書き込みしてくれるみなさんのおかげで助かっています いつもギリギリですけど」
(掲示板書き込み)

というように、リアルなコミュニティから遠ざかり、ネットの世界へと入り込んでしまった。同じ趣味をもつものや、同じ境遇の人たちと関わることで、自分が受け入れられる住みよい星がネットであるという希望をもったのかもしれない。

加藤は2ちゃんねるの住人だったようだ。2ちゃんねるは、たくさんのジャンルに分かれていて、その中にスレッドが数多くたっているような巨大掲示板で、自分の好きな所を閲覧したり、書き込んだりできる。その匿名の掲示板内で加藤がコテハン（固定のハンドルネームを使う人）だったという事実が本田・柳下の対談に書かれている。（『秋葉事件をどう読むか!?』）ネット内で存在を主張したい願望があったのかもしれない。俺はここにいます。だが、2ちゃんねるでは、「自分語りウザー」とか「チラ裏」（チラシの裏にでも書いとけ）などと言われることも多くある。「自分語り」は「流れを読まない」ことが原因で嫌がられるので、「空気を読まない」と同等な意味だと思う。現実でもネットでも空気を読まなければ嫌われ、コミュニケーションスキルが低いとみなされる社会とはかなり高レベルだ。

2ちゃんねるから加藤は逃げ出した。対談では、「彼の携帯サイトの書き込みを見るとどうやら個人的なコミュニケーションを求めているようだから、2ちゃんねる的な薄いコミュニケーションでは満足できなかったんじゃないかなあ。」（同書柳下の発言）とある。より濃厚な馴れ合いが欲しくて個人掲示板に入り込んだのだと私も推測する。

しかし、ネット世界でうまくやっていくことができなかった。

6月4日 「現実でも一人 ネットでも一人」

少しさかのぼって、3月6日の書き込みにこんなものがある。

「書き込みをしてもヒット数が自分の分しか増えないのは正直さみしいものがありますね…
はじめからわかっていたはずなのですけど」

ヒット数を気にしている節があった。自分の掲示板のアクセスカウンターがまわらない。この場所を見ているのは自分だけ。結局ネット世界でも自分の価値は証明することができず、さらに孤独に拍車がかかってしまった。

「非モテ」と「男」

リア充という言葉はネットでよく見かける。意味は「リアル（現実）が充実する」ことである。多くは恋愛やビジネスの順調を示す。ネットと現実をしっかりと分けて、嫌味・妬みをこめて「リア充」という言葉を使う。ネットは別に存在するもう一つの世界という認識が広いということの証明にもなる。

5月9日 「私も「アニメやエロゲーがあれば幸せ」という人種ならよかったのですが、不幸なことに現実に興味があるのです」

という書き込みがあるように、彼はリアルの充実を夢見ていた。仕事でうまくいくように、恋愛ができるように、友達ができるように、そんな風に願っただろう。しかし彼は一つも持っていなかった。彼にとって最大のリア充は彼女がいることだっただろう。掲示板に書き込んだ記事で最も多かったものは「非モテ」をにおわすものだった。

4月25日 「恋愛を楽しめるのは25歳までだと聞いた事がありますが、もうとっくに過ぎてしまいました もっとも、不細工には恋愛する権利がそんざいしませんが」

6月4日 「彼女さえいればこんなに惨めに生きなくていいのに」

6月5日 「彼女がいれば車を売る必要も無かったし」

「彼女がいれば車のローンもちゃんと払ってるし」

「彼女がいれば夜逃げする必要も無かったし」

「彼女がいない、ただこの一点で人生崩壊」

といったように、掲示板には「彼女がいない」「彼女が欲しい」という類の膨大な量の書き込みを残している。これに関して上野千鶴子はこのように言及した。

「「彼女がいる」ことが、すべてのマイナスから自分を救ってくれる逆転必勝の切り札だと考えるか
れの思考は完全に倒錯している。実際の因果関係は、「仕事を辞めることや、車を無くすことや、夜逃げすることや、携帯依存になる」ような奴に彼女はできない、となるはずなのだから。」（『非モテ』のミソジニー）

彼女がいればリア充になれる、孤立した自分を救えると信じて疑わなかった加藤。そんな彼にとって「彼女」とはどのような存在を指すのか。同書で上野はこう言う。

「他のすべての要因において欠格であっても、最後の要因、女がひとり自分に所属していることだけで、男が男であるためのミニマムな条件は満たされる。逆に言えば、学歴、職業、収入など他のすべての社会的要因において優越していても、「女ひとりモノにできない」男の値打ちは下がる。男性集団はこういう男をけっして一人の男、すなわち集団の正式の成員とは認めない。(略)

「彼女がほしい」とのぞんだK君の叫びが、ほんとうに「ひとと関わりを持ちたい」という欲望だったとしたら、かれのなすべきことは秋葉原へ行くこととはまったく違うものになるはずだった。だが、少なくともその行動から判断する限り、K君もJ君も、かれらがのぞんだのは、自分を「男にしてくれる」ひとりよがりな「女の所有」への欲望でしかなかったと言うほかない。」

J君とは女優の藤原紀香と結婚し、離婚したお笑い芸人陣内智則のことである。

「対人評価がコミュニケーションスキルに一元化」することで、スキルがない男は女を「所有」することができなくなった。そんな男性は、「男」と認められたいというただのわがままな欲望で「彼女」が欲しいと発言する。

こんな意見もある。『アキバ通り魔事件をどう読むか!?』で、鈴木ユーリは以下のように言及した。

「全書き込み約九百件中、百五十件ともっとも多いこのいわゆる「非モテ」描写だが、そこには一般論には取り替えがたい加藤の並はずれた承認願望があるとおれは思っている。スレタイ（スレッドタイトル）が「【友達できない】不細工に人権なし【彼女できない】」だったように、そこでは「友達」と「恋人」が等価におかれ、時にその二つは混交し、モテの話なのに性欲の発露が感じられない。」

私も加藤の書き込みから、「性欲の発露」は感じられなかった。“モテる”とは、恋愛関係において異性から必要とされることだけに限定されるわけではなく、その域は自分以外の他者にまで及ぶ。しかし彼にとって、友達と恋人は本当に等価だったのだろうか？

確かに、彼の承認願望は強い。どのように承認してほしかったかという点、上野のいう「男に男と認められたい」ということだと私は感じる。加藤のいう「友達」の性別は「男性」で、男に自分が男であると承認され男性集団というコミュニティに所属したかったのではないだろうか。恋人と友人は等価ではなく、あくまでもコミュニティに所属する（＝加藤のいう友人を得る）ための手段（＝彼女）ということ。こうなれば、等価とは言い難いし、彼の友人や恋人の定義が本来のものと少しズレているようにも感じる。

コンプレックス

3月16日 「合コンに誘われました あり得ません たとえ1億円積まれても行きません」

彼女が欲しい欲しいと言っている裏で、自分から出会うことを拒否している一面がある。その理由は彼の持つ容姿へのコンプレックスが原因だった。

5月19日 「顔のレベル…0／100 身長…167 体重…57、歳…26 肌の状態…最悪 髪の状態…最悪、輪郭…最悪 普段会う人の人数…0 普段話す人の人数…0 自分の好きな所…無し 自分の嫌いな所…全て 最近気を使っていること…無し これだけは他人に負けれないこと…無し」

これは加藤の自己評価。見て分かるように酷く自己評価が低い。

5月12日 「こんな時間から拘束されて、解放されるのは明日の朝4時です やはり不細工には人権などないのですね」

5月28日 「不細工な私は存在自体が悪なのですね」

5月29日 「不細工な私の命の価値はゴミ以下ですよ」

6月4日 「車ももてない不細工は存在価値なし アシにもなれやしない」

6月5日 「あ、不細工な俺は存在自体が迷惑なんだっけ」

上野千鶴子の『非モテのミソジニー』では、非モテの原因が自分の不細工さにあると何度も書き込む理由をこのように書き記した。

「非モテを容姿の悪さに帰することは、ある意味で自尊心を守る安全な方法だ。というのは、努力すれば変えられる（と考えられている）学歴や職業ではなく、容姿は努力しても変えられず、親を恨むしかない要因だからだ。また、学歴や職業や収入など、女性を惹きつけるかもしれない他の要因をすべて欠いた（そしてそれを認めることがつらい）K君にとって、容姿だけが一発逆転を狙える切り札だったかもしれないのに（そしてホストクラブにはその種のサクセスストーリーがあふれているというのに）、それさえ持てない自分の最後の拠点が切り崩される思いを味わったのかもしれない。」

不細工不細工と書き連ねる加藤は、必死に自分を守ろうとしていた。不細工だからモテない・認められない、と自己責任ではないことをアピールしていたようだ。

そんな彼はBUMP OF CHICKENのファンだったようだ。BUMP OF CHICKENの『ギルド』の歌詞をネット上に書いている。彼が特に好きだったと思われる歌詞はこれだ。

「美しくなんかなくて 優しくも出来なくて それでも呼吸が続くことは許されるだろうか その
場しのぎで笑って 鏡の前で泣いて 当り前だろう 隠してるから 気づかれないんだよ
夜と朝を なぞるだけの まともな日常」

顔もよくない、性格もよくない。それでも生きていくことは許されるだろうか。作詞・作曲を手掛けているBUMP OF CHICKENのフロントマンである藤原基央が、このような意味で書いたのではなくても、私や加藤は自由に歌詞の意味を受け取る権利がある。彼はこの歌詞の真のメッセージをくみ取ることができなかったのかもしれない。『ギルド』の歌詞はこう続く。

「愛されたくて吠えて 愛されることに怯えて 逃げ込んだ檻 その隙間から引きずり出してやる
汚れたって受け止めろ 世界は自分のモンだ 構わないから その姿で 生きるべきなんだよ
それも全て 気が狂うほど まともな日常」

高校生活で存在が薄くなりはじめ、友達も彼女もできないことに悩むようになっていった。彼のモテたいという願望には、彼女と幸せな生活がしたいとかセックスがしたいとかそういった欲求以外にも「男として承認されたい」という欲求が根底にはあった。社会に男が立つための足場として「女」を利用し

ているという貧しい価値観がはびこっていた。彼が欲していたのは「自分は〇〇だ」という証明だと私は思う。たとえば教師をしているなら「自分は教師だ」と言えるが、派遣の彼にそれはできない。だから彼は「自分は男だ」と言いたかった。さらにアイデンティティを証明できずもがいていた彼に、派遣のクビの恐怖が同時に降りかかった。いよいよ言い渡されそうな「戦力外通告」。それが彼の背中におかれた「最後の一本の藁」となった。

替えのある自分・派遣のアイデンティティ

仕事というのは自分のアイデンティティを確立する上で非常に重要なポイントになり得る。働くことで社会との繋がりを持ち、必要とされる感覚を味わう。派遣の彼はアイデンティティが希薄になり、自分が何者なのか、果たして必要な人間なのかと不安に陥った。

6月5日 「ああ、そういえば、クビ延期だって」

「別に俺が必要なんじゃなくて、新しい人がいないからとりあえず延期なんだって」

「派遣がやってた作業をやりがる正社員なんているわけない」

「自分は無能です、って言ってるようなもんだし」

派遣＝無能。別に自分は必要とされない人間。彼の勝手な思い込みではなく、世間がそう言っている。日本の経済状況が下降線をたどり、労働環境の悪化が進行する中での事件の発生。彼が犯行に及んだ理由として一番に取り上げられたのは「作業場に行ったらツナギが無かった 辞めろってか わかったよ」と6月5日に携帯サイトを書き込んだ記事だったため、非正規雇用の問題に注目が集まった。しかし彼は金に困って生活が困難になったため無差別殺人を起こしたのではない。根底には承認欲求というごく当たり前の生理的欲求があった。

製造派遣というのは単純作業を長時間やらされ給料だって正社員に比べたら安い。それでいて彼の働く車関係の会社はこの不況の打撃をモロに受けた。それは会社のエリートではなく末端の工場で働く非正規雇用者の人件費削減で応急処置された。いなくてもいい存在。自分でなくても替わりはいくらでもいる。使い捨て人間。そうやってまた自己評価は低くなるばかりだった。先に触れた雨宮処凛と萱野稔人の本『「生きづらさ」について』では、派遣と人権問題の関わりについてこのように書かれていた。

萱野 「派遣業界では、労働者を派遣することを「弾を込める」というんですね」

雨宮 「はい。だから彼らの賃金も人件費じゃなくて、「物件費」として管理されています。工務部、調達部という、部品を管理する部署が派遣の管理をしているということを聞いて、「本当に部品なんだ」と思いました。なぜこれが「人権問題」としてクローズアップされないのか不思議です。」

萱野 「要するに、同じ人間としてみていないということですよ。」

社会では、派遣社員は部品という認識らしい。人間以下、動物以下、もうモノとしての扱い。いや、モノ・機械の方が重宝される。彼の働く工場では、責任者が「6月いっぱい200人から50人まで契約人数を削減する」と話した。

5月28日 「300人規模のリストラだそうです やっぱ私は要らない人です」

しかし、彼の業務態度に問題はなく契約の継続が伝えられている。しかしいつクビを切られるかわからないその状況で不安は和らぐことが無かった。そしていつものように出勤すると、あの有名な事件が起こる。

6月5日（事件3日前） 「日に日に人が減ってる気がする」
「大規模なリストラだし当たり前か」
「作業場に行ったらツナギが無かった 辞めろってか わかったよ」

今でもツナギが無かったことが原因で起こった事件だと思っている人が少なくない。自殺関連の本を数多く執筆している高橋祥友の著書『あなたの「死にたい、でも生きたい」を助けない』では、自殺の契機に関してこのように綴った。

「ところでthe last strawという英語の言葉を耳にしたことがあるでしょうか。文字通りには「最後の一本の藁」ですが、比喩的な意味があります。頑丈なラクダは砂漠のような厳しい環境でも、重い荷物を背負って旅を続けていきます。背にどんどん荷物を載せていっても、ラクダは耐えます。そして、さらに荷物を増やしていった、いよいよ耐えられる限界まで来ると、最後に載せた最後の一本の藁が、ラクダの背骨を折ってしまうのです。そこでこのthe last strawとは、「最後のわずかな負荷、忍耐の限界を超えさせるもの」という意味があります。

自殺に先立って複雑な原因がさまざまに重なって、「準備状態」が長期間にわたって固定化していき、自殺の引き金となる「直接の契機」はむしろごくささいなものである場合の方が圧倒的に多いのです。」

加藤にとっての最後の一本の藁はツナギが無かった事件かもしれない。これまでに蓄積された不満が、ツナギが無かったことによって自分のキャパシティを超え溢れ出し、自殺ではなく他人を傷つけるという行動を起こしてしまった。そして結局自分をも傷つけてしまった。

条件付きの愛情

仕事をクビになり職を失っても、帰る家や迎えてくれる家族がいればなんとか生き延びられるし、再スタートの可能性もある。恋人や友人がいなくても、家族が必要としてくれれば自分の存在価値が生まれる。しかし加藤にとって家族というセーフティネットは無いに等しかったこと、それは事件へ繋がる一つの要因だった。

家族については『週刊現代』が事件後に弟の手記を載せたのでそこに詳しい。加藤の家族は大体の人が異常だと思うだろう。母親・父親・加藤自身と、3歳離れた弟が家族構成。彼の両親…というか母親はいわゆる「教育ママ」だった。父親はそれに干渉せずに黙っていた。加藤が高校を卒業してからの7年間は弟と音信不通。兄弟の関係が良好だったのは小学3年生までだったそうだ。弟は加藤の事を、手記では「アレ」や「犯人」と呼んだ。

『週刊現代』の弟の手記によれば、「いい教育が良い将来に繋がると信じる母の愛は、過剰な形で私たちに与えられました。」ということ。母親の愛は加藤にとって「母親の所有物である自分」と捉えてしまう原因となった。どんな教育が施されていたのだろうか。『週刊現代』の弟の手記を引用しながら考えてみる。

弟が「ハッピーな時期」と呼んでいた時期がある。それは弟が小学3年生ぐらいになるまでのことらしい。弟は言う。「家庭の中が少しずつ冷えていったのは、私が小学校4年生の頃からです。」ということは、

加藤が中学1年生の頃から「ハッピーな時期」は崩壊していったことになる。加藤の通っていた中学校はとても奇妙なところだったようだ。後に弟も同じ中学に通い、教師陣も共通する。弟はその中学校の教育を「まるで軍隊のよう」と表現した。加藤がそんな厳しい中学に通うことになったことで、母親の「教育」が過激なものにエスカレートしたのかもしれない。学校への提出物の検閲や、作文丸ごと書き直させること、新聞紙上にぶちまけられた食事を泣きながら食べたことは先に記した。それ以外にも、テレビは「ドラえもん」と「まんが日本昔ばなし」しか見せてもらえなかったこともある。また、「10秒ルール」といい、母親の出した問題に10秒以内に答えられないとビンタされるなど、異常な教育を受けて育った。そして、高校入試がやってくる。兄加藤は県立青森高校に受かった。それを両親はすごく喜んだ。

「アレが地域でも一番の人間が集まる「セイコー（県立青森高校）」に入学しました。アレがセイコーに合格したことに、両親は本当に喜んでいました。冷えた関係ではありましたが、合格祝いのパーティが開かれました。普段は酒を飲まない父も酔っ払って上機嫌になりました。（略）

両親に祝福されて高校に入学した犯人ですが、秀才ばかりが集まっていたので、中学では優秀だった彼が、あっという間に普通の人になりました。母もだいぶ成績について注意したんだと思います。しかし、アレは、聞こうとしなかった。母は口にこそ出しませんが、そのとき母の期待は私に移ったんだと思います。私への愛情の移行を犯人は敏感に嗅ぎとり、自分は必要のない人間だと誤解したんだと思います。母に、

「俺より弟を優先して、俺を見放すのか！ 弟だけにしたいんだろう」

と詰め寄っている姿を目撃したことがあります。」（弟の手記）

成績が良ければくれる愛情。悪ければ母親は自分を見放す。本来家族とは無償の愛を与えてくれ、存在を必要としてくれるセーフティーネットであるはずなのに、加藤は「成績優秀」という条件を満たさなければ愛情を与えてはもらえないと考えたのではないだろうか。

彼がこのような家庭で育つことで、家族以外の人間関係でも「条件」を気にするようになったのかもしれない。彼女や友達は「顔がいいという条件」「明るいという条件」がなければ得られない。社会は「正社員として働いているという条件」を満たさなければ必要とされない。これはひどく悲しい価値観だ。このように思う加藤は、自分が付き合う人をジャッジする場合も「条件」を提示するのだろう。あらゆる条件を満たすことのできなかった加藤は、自分に存在価値はないと思い込み、本田のいうように「スキルがなくても物語の主人公になれる」殺人を犯してしまった。

ワガママな殺人

家族・友人・恋人…と人間関係にはたくさんの形がある。どんな形であれ、人と関わりを持つということでは自分の存在価値に気付くことを可能にする（割合が大きい）。人と関わりを持つために私たちは人に好かれなければならない。今では人気となる対象がコミュニケーション力のある人に集中してしまい、それが無い人は人気がなくなってしまった。「人に嫌われたくない」という気持ちが「人の目」を過剰に気にすることに繋がり、小さな気遣いや親切が過剰になってしまった「空気を読み、自分の色を消す」という行為に移り変わってしまった。そうして「透明な存在」を生み、自尊心や存在価値を喪失させた。自分には何もないと思ひ込むようになってしまった。そんな自分でも主役になれるのは殺人しかない、もしくは自殺して人生を終わろう。そんな風に極端な思考をもつようになっていく。

私たちは、誰かが作り上げた勝手な「常識」の中を生きている。「空気を読んで今は自分の話をしないの

が普通」「いい学校に入りいい会社で働けば成功」「彼女のいない奴なんか本物の男じゃない」。こんなのは勝手だと思わないだろうか。人口分の人生があって、それぞれの「普通」「成功」「男である・女である」の価値観があるはずなのに、何故か「基準」が存在してしまっている。これは幸福なことではない。私はあなたじゃないし、あなたは私じゃない。好きなものを好きと言えないとか、同調しなければ仲間じゃないとか、そんなのは他人を生きているのと同じだ。しかし、これは「自分は自分!」と「ワガママ」し放題すればいいという話ではない。それこそ殺人してもいいじゃないか、何を盗んでも何を壊してもいいじゃないか、ということになってしまう。上田紀行の『生きる意味』では、「ワガママ」と「我がまま」の違いについて記述してある。そこでは、人と合わせることに必死で自分自身を抑圧するのではなく、自分自身の人生を取り戻し生きることを「我がままに生きる」といい、自己中心的で周りを意に介さないことを「ワガママに生きる」と区別した。

「自分自身に対する自尊感情がある人間ならば、「人の目」がないところでも、なんでもやり放題ということにはならない。(略) 自尊心のある人は、「私としたことが、恥ずかしい」ということはあまりしないし、してしまったにしても反省する。(略)

〈我がまま〉が〈ワガママ〉に転ずるかどうか。それはそこに自尊感情、自己信頼があるかどうか大きな分かれ目になる。」

自尊心を持つこと。これは「ワガママ」を抑制することに繋がる。自らは尊い、そう最初に教えてくれるのは家族による無条件の愛からではないだろうか。それが欠落していた加藤は「殺人を犯すなんて、自分としたことが恥ずかしい」と計画中に思いかえせずに、「ワガママ」な自己主張をしてしまった。

おわりに

音楽

私は音楽が好きだ。小学生から中学生の間はあらゆるテレビ局の音楽番組を見ていたし、オリコンチャートは欠かさずチェックしていた。だから1位から10位に入る曲は必ず口ずさめた。しかしそれは音楽が好きだからではなかったみたいだ。流行りを知らなければ周りの会話についていけなかったからだ。『そんなことも知らないのか』『みんな知っているのになぜあなたは聴かないのか』。そんな風に思われるのが嫌だった。そうして毎日アンテナを張り巡らせ、敏感に流行をチェックするようになった。

そんな私が高校生の頃、衝撃的な出会いを果たした。周りは誰も知らないような、重低音をかき鳴らすカッコイイバンドを好きになった。これまでの「好き」が勘違いで、これを本当の「好き」と言うんだと気づかされた。そのバンドが好きなことを、流行りやファッション感覚で音楽を聴いている人たちは理解してくれない。むしろおかしいんじゃないかと言われる。それでも私は音楽に関しては全く気にすることが無かった。本当の「好き」を知った私は、自分に自信を持つようになったのだ。

残念ながら、ランキングや流行りに左右されている人は多い。みんなが好きなものを取りあえず好きになっておけば少し安心するのわかるけど。でも本当の自分を見つけてみると、それは自分の自信を得ることになる。きっと。私は音楽を通じてコミュニティに所属することができた。大切な友人と出会い、生き甲斐と言える趣味にまでなった。未来への展望も開けた。なにより、本当の自分を見つけることができたのだ。

私は加藤に共感できると、他人ごととは思えないと言った。しかし、決定的に違うこと、それはやはり尊

厳の有無だと思う。だから私は「ワガママ」に、自分と違うジャンルの音楽が好きな人を軽蔑したりしないし、殺人を犯そうなんて思わない。自分を信じてやれば、人と違ったって「我がまま」に生きていくことができる。

60億の価値観

個性のある人が好きだ。女子高生はスカートの短さを先生に怒られると、「生徒の個性を校則で潰すのか」と反論する。しかしそれは個性なんかじゃなく、「みんながしてるから」「流行りだから」「普通だから」が理由だろう。しかし、それではかわいそうだ。自分がかawaiiそうだ。透明になって、周りに色付けされている、偽り・勘違いの「好き」は個性を潰していることと等しい。

今必要なのは、「価値観の育成」だと思う。誰に染まるでもなく、自分のモノサシを持って良いとか悪いとか判断できること。周りに身を委ねていればすごく楽なのは分かる。自分で考えなくても、周りが進むべき道を教えてくれる。しかしそれでは尊厳など生まれないし、みんなと同じなんだから替えのある存在と化してしまう。ランキングから目を伏せてみませんか。相手への同調しかないコミュニケーションの取り方をやめてみませんか。そうすればもしかしたら本当の自分を見つけられるかもしれない。自分自身が見つけて欲しがっている。気を付けるべきなのは「ワガママ」にならないことだ。自分が60億分の1であることを、しっかり認識してもらいたい。それができる社会になってほしい。

秋葉原無差別殺傷事件

やっぱり加藤は嫌いじゃなかった。彼は被害者の方に手紙をよせた。

「私の罪は万死に値する」

「どうせ死刑だと開き直るのではなく、すべてを説明することが皆様と社会に対する責任」

彼が彼自身を見つけてあげられたなら、尊厳をもって自分の存在価値に気付いていたら、そう思うととても切ない。尊厳を十分に与えないような労働環境や、人間関係、家族関係が、少しずつでも改善していたら加藤の言う「真実を明らかにし、対策してもらうことで似たような事件が二度と起らないようにすることで償いたい」という考えを実現できるのではないかと思う。

秋葉原無差別殺傷事件は、被害者やその遺族、そして加藤の親族や加藤自身がただ苦しめられ続ける過去の出来事にしてはいけない。識者の意見も多種多様なこの事件を、私が考えつくすには時間も頭も足りなかった。しかし、加藤に判決が下ったあとも、生きていくことの意味を、そして限りなく存在する価値観を相互理解する方法を私なりに模索していきたい。

参考文献

- 鶴見済『完全自殺マニュアル』太田出版1993
鶴見済『人格改造マニュアル』太田出版1996
岡田尊司『アベンジャー型犯罪 秋葉原事件は警告する』文春新書2009
『アキバ通り魔事件をどう読むか!?!』洋泉社2008
赤木智弘『若者を見殺しにする国』双風舎2007
雨宮処凛『排除の空気に唾を吐け』講談社現代新書2009
雨宮処凛『生きさせろ！難民化する若者たち』太田出版2007
雨宮処凛 萱野稔人『「生きづらさ」について』光文社新書2008
上田紀行『生きる意味』岩波新書2005
高橋祥友『あなたの「死にたい、でも生きたい」を助けたい』講談社+α新書2007
浜井浩一 芹沢一也『犯罪不安社会』光文社新書2006
辺見庸『しのびよる破局』大月書店2009
斉藤貴男『強いられる死 自殺者三万人超の実相』角川学芸出版2009
根本橋夫『人と接するのがつらい』文春新書1999
加納寛子『「誰でもよかった殺人」が起こる理由』日本標準2008
『scripta』紀伊国屋書店出版部 上野千鶴子連載『ニッポンのミソジニー』の第十一回「「非モテ」のミソジニー」
2009年夏号掲載
『週刊現代』「秋葉原通り魔弟の告白」前篇「狂気の兄と、歪んだ母の愛」2008.6.28
『週刊現代』「秋葉原通り魔弟の告白」後編「兄の謝罪と反省は、すべて嘘だ」2008.7.5
『週刊現代』「秋葉原通り魔 弟の煉獄日記」2008.7.12
秋葉通り魔事件 被害者友人の日記『近くそして遠い雲の下で』
<http://plaza.rakuten.co.jp/airhead39/diary/200806140000/>
『東奥日報』加藤智大容疑者のものとみられる携帯サイトの書き込み
http://www.toonippo.co.jp/news_kyo/detail/2008/0615.html
geek『アキバブログ』
<http://blog.livedoor.jp/geek/>

(卒業論文指導教員 加納実紀代)